

特集はイーリー キシモトとメルボルンです。

2003 06G 04

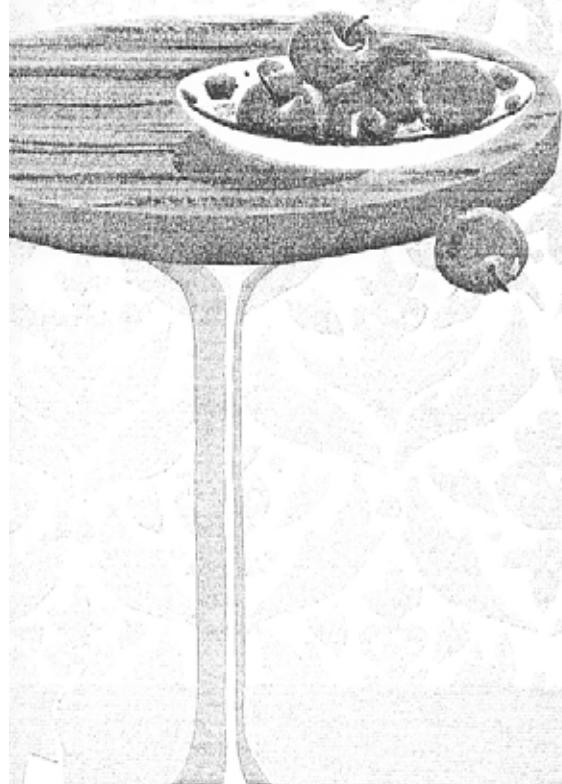
リラックス増刊

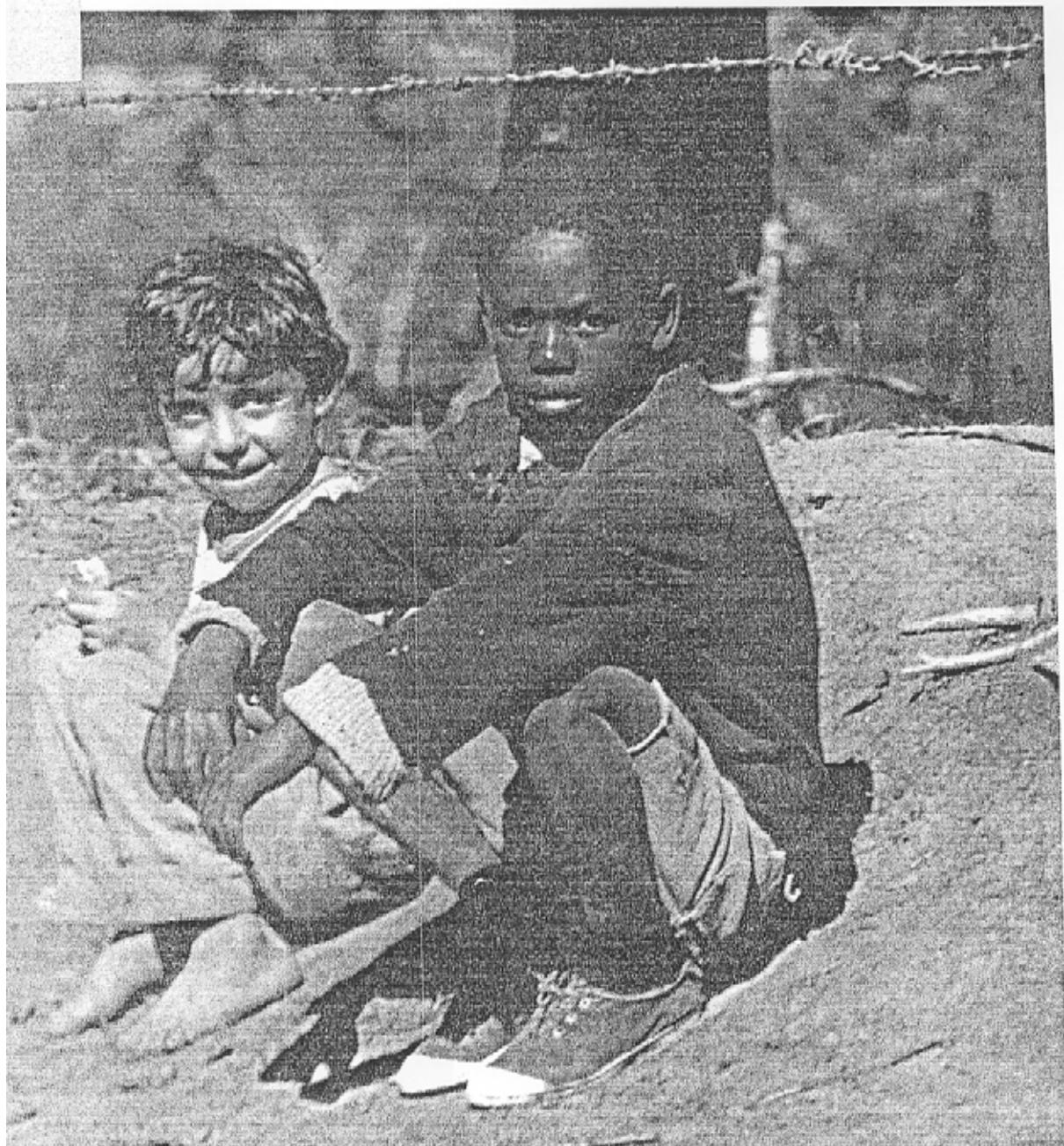
MONTHLY
JUNE 2003

定価 750yen □

2003年6月1日発行

for GIRLS



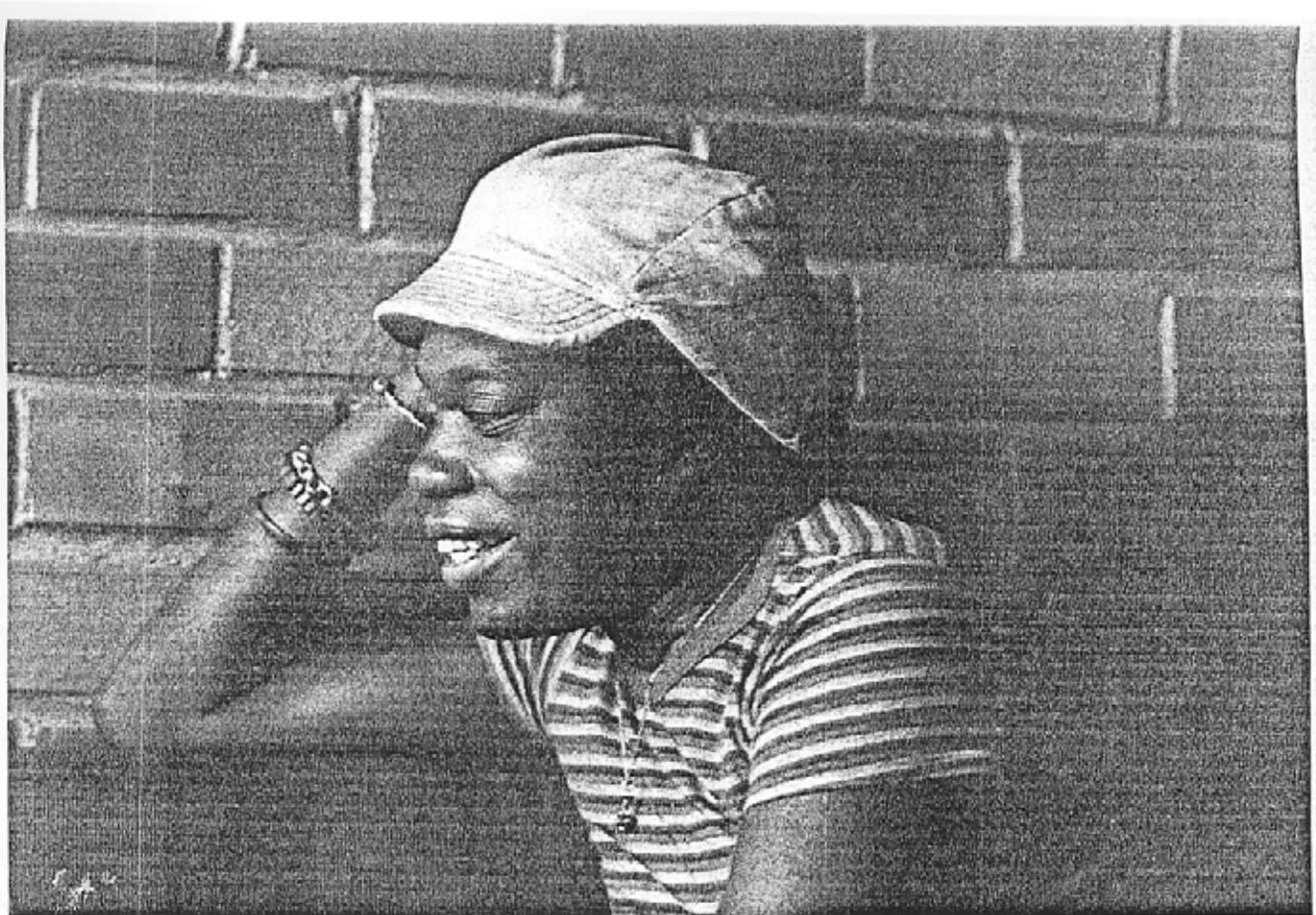


Somingo 4

music for sunday lovers

日曜日の音楽

cl. Kepei Kimura ♪, Takashi Horiuchi ♪, Satoru Muranushi ♪,
asanori Koyama ♦, Ikuo Ono ★, Tomoko Kataoka ▼
anks to Hiromi Nishimoto



デビュー以前のミルトンは、21歳で生まれ故郷からペロ・オリゾンチに移り住みます。ピアノ・トリオでベースを担当したりしていましたが食うや食わざの生活が続き、よくロー・ボルジェスの家でご飯を食べさせもらっていたらしいです。ボルジェス・ファミリーは子どもが11人いたので、そこに1人くらい加わっても影響なし、だったのでしょうか。

日曜日にはブラジルの声と称されるミルトンを。

みなさんは日曜日にどんな音楽を聴きますか？その日が晴れのこともあります、雨や曇りの時もありますね。晴れだから嬉しいとは限らないし、雨だから憂うつということでもない。そんな時にどんな音楽を選んで、日曜日の複雑な気分を高揚させたり落ち着かせたりしていますか？

フランス語で「日曜日」という名前を持つ鎌倉のとあるカフェのマスターは、数年前にカエターノ・ヴェローゾとガル・コスタのデビューアルバム『Domingo』を聴いたことがきっかけでブラジル音楽の不可思議な魅力に触れてから、ブラジル音楽についてもっともっと知りたくなりました。しかしブラジルという国が日本の23倍もある、とても大きく大きい国であるのと同様に、ブラジル音楽もとても大きな広がりを持っていて、全体像がつかみにくいものなんです。そこで、ブラジル音楽の好きな仲間たちを誘い、ブラジル音楽を勉強しつつ紹介する『ドミンゴ』(ポルトガル語で日曜日)という

イベントを始めて、さらなるブラジル音楽の魅力にはまり込んでいるのです。

そのイベントはレコードとビデオとトークで、ブラジル音楽の魅力を分かりやすく紹介するものです。そしてそのイベントのメンバーが中心になり、同じようなことを誌面で展開しているのが、この『domingo/music for sunday lovers』なのです。

4回目の今回は、“ブラジルの声”とブラジル人自らが大いなる誇りをもって説くアーティスト、そしてドミンゴのメンバーみんなの大好きなミルトン・ナシメントをご紹介します。

ミルトン・ナシメントは1942年の10月26日にリオデジャネイロに生まれました。1歳3ヶ月の時に、ブラジル内陸部のミナス・ジェライス州のトレス・ボンタス(=3つの丘)という街へ養子としてもらわれていき、そこでとても大切に温かく育てられています。

■買ってもらった小型ディオンが彼の最初のす。13歳の時には幼ル・チゾ(キーボード)を組み、週末のダンスで人前で演奏をするよ分のギターを手に入れ、その頃にはアメリカループ、プラターズをした。ボサノヴァがリ前のことです。

住み慣れたトレス・ミナス・ジェライスロ・オリゾンチへ勉強の、結局は学校へは音楽の方へと急速に傾もなくマルシオ・ボルミルトンの最初の共作・ボルジェス、フェチラ、現在も親密な交らしい仲間に出会うこ醫音樂への拍車がかか

は初めてチャンスをアルテート・サンバカーブのメンバーに抜擢65年にはリオのレコンで録音し、LPもり、グループの中ではソ

としてフィーチャーさ明様の際立った声で歌主目を集めていた若き・ヘジーナが、ミルト「塩の歌」を自分のアしたのはその翌年、66

ミルトンの夢が実現すす。67年にサンバウ局主催のソングフェア作った「トラヴェシニョ・ドス・サントス第2位を獲得したのも別のオリジナル曲男性歌手賞に輝きましたは、アーティストと

されたのです。ミルト25歳の時でした。よファーストアルバムを、憧れのピアニスト

兼アレンジャーのルイス・エサを迎え、彼が率いるタンバ・トリオを伴奏陣に起用して制作し、ミナスのインディレーベル=Codilからリリースしました。続いて先に渡米していたアレンジャーのエウミール・デオダートからアメリカへ呼ばれ、彼のアレンジでアルバムを制作しますが、それは69年にCTIレーベルから『コーリッジ』というタイトルで全米発売されるという快挙となりました。

ミルトンはその後しばらくアメリカとメキシコで仕事をしてからブラジルへ帰国し、今度はオデオンと契約を交わしメジャーデビューともいえる『ミルトン』を69年にリリースします。次に、幼なじみのキーボード奏者兼アレンジャーのヴァギネル・チゾ率いるグループ「ソン・イマジナリオ」とともに、よりロック色の濃い『ミルトン・ナシメント』を70年に発表しました。

そして72年、ミルトン30歳の時。仲間たちとスタジオで共同作業を行い、全21曲でLP2枚組という大作『ミルトン・ナシメント&ロー・ボルジェス/クルビ・ダ・エスキーナ』を発表しました。それからミルトンやローたちを中心とするこれらのメンバーのことを総称して、「クルビ・ダ・エスキーナ=街角クラブ」と呼んでいます。

この作品の中では、ミナスの若者たちを中心にして才能に溢れたミュージシャンたちが自由な発想で相互に触発し合い、心から楽しんで一緒に音楽を作っている様子が、それぞれの曲からしっかりと聴きとることができるべきでしょう。彼らは、ブラジルの伝統音楽であるサンバやショーロにブラジル各地方の音楽、そこへジャズやクラシックから、ビートルズやロックまで加えてミックスし、「混血の国=ブラジル」ならではのミクスチャー・ミュージックを作り上げています。そして、この作品で知り合った同士がそれぞれにまた新たな音楽を創造し、70年代のブラジルは音楽の黄金時代を迎えたのです。

さあ、ミルトン・ナシメントが生み出した、宝石の原石のような輝きを持った音楽を、みなさんも今度の日曜日に聞いてみませんか？

ミルトンの日本語カバー。

メロディメーカーとしても、ミルトン・ナシメントは世界中で多大な評価をされています。その証拠に彼の曲は、いろんな国でカバーされ英語や仏語等に翻訳されて歌われてきました。それは日本でも例外ではなく、「トラヴェシア」をムーンライダースが1978年、EPOが94年にそれ取り上げ、「砂の岸」を95年にTHE BOOMが日本語詞と原語詞を交えて歌い、2003年にmegが「クルビ・ダ・エスキーナ2」に独自の歌詞を乗せてミルトン・ナンバーを日本語でカバーしました。



宮沢和史

宮沢さんはミルトン・ナシメントの曲を日本語でカバーされていますが、ミルトンの曲と出会った経緯を教えて下さい。



宮沢和史(以下宮沢) 初めてリオデジャネイロに行った時、向こうで知り合った人からたくさんのブラジル音楽を紹介してもらい、レコード店に行ってたくさん買い集めた中にミルトンのCDがありました。

なぜミルトンの曲を日本語でカバーしたのでしょうか？ ミルトンの楽曲と日本語の相性は？ そしてミルトン・ナシメントの魅力は？

宮沢 ミルトンが作る歌の背景には広大なブラジルの内陸部ミナス・ジェライス州の自然、そしてそこに生きる人々の姿を感じ取ることができます。彼の歌を聴いているとミナスというある地域を超えて、誰しもが心の中に持っている懐かしく愛おしい理想郷のような所が思い浮かんできます。しかももしかしたらそのような理想郷はもはやこの地球上には存在しなくて、ミルトンは歌の中にそれを夢見ているのかもしれません。何年か前にバイアの女性シンガー、シモーネ・モレーノが来日し、ペベウ・ゴメスのギター一本で「砂の岸」をやっせりとしたテンポで歌い上げた時、僕にとっての理想郷である沖縄の空がパッと現す一面に広がりました。その時に三線を使い、民謡歌手の我知吉より子さんとデュエットするというアイディアを思いつきました。日本語詞に関してはなるべく原詞の世界を壊さないように心がけ、アフリカから労働力としてサルヴァドール経由でミナスまで遠い遠い道のりを旅した物語と、沖縄からブラジルへ理想を掲げ、夢を見て海を越えた人たちとの物語をだぶらせて詞を書きました。

宮沢さんの好きなミルトンのアルバムもしくは、楽曲を教えて下さい。

宮沢 アルバムは『MINAS』が好きです。

meg

ミルトン・ナシメントの曲を日本語でカバーされていますが、ミルトンの曲と出会った経緯を教えて下さい。



meg 「Remix」編集部に遊びに行っていた時に、編集長の小原さんが兼意でmeg用に「コイちゃんセレクション」というCD-Rを作ってくれて、その中に入っていた1曲です。

なぜミルトンの曲を日本語でカバーしたのでしょうか？ meg メロディラインと曲の構成が気に入ったので。

ミルトンの楽曲と日本語の相性は？

meg 逆にいかがでした？ 原曲聽いても分からなくなるくらい変えてやってますけど。

ミルトン・ナシメントの魅力は？

meg やはりメロディラインです。あと頭かな。

megさんの好きなミルトンのアルバムもしくは、楽曲を教えて下さい。

meg ここは『街角クラブ(=CLUBE DA ESQUINA)』。共作者のロー・ボルジェスのアルバムもオススメ。

MILTON NASCIMENTO DISCOGRAPHY

	NATIVE DANCER (1975)	YAUARETÉ (1987)	
 <i>sunny</i>	アメリカのジャズミュージシャンのウェイン・ショーターのアルバムにヴォーカリストとして参加するも、ゲストというよりは、ウェインとミルトンのコラボレーションアルバムである。西海岸の乾いた音が印象的！◆	 <i>cloudy</i>	積極的にインターナショナルな音楽活動を行うためにSONYへ移籍しての第1弾で、ブラジル音楽世界進出の影の仕掛け人＝クインシー・ジョーンズの名前もクレジットされている。「歌と瞬間」という名曲はここから生まれた。◆
TRAVESSIA (1967)	MINAS (1975)	MILTONS (1989)	
 <i>sunny</i>	 <i>rainy</i>	 <i>Cloudy</i>	
彼の名を世に知らしめた名曲をタイトルに据える1st。胸騒ぎむしるメロディと氣品ある歌声に、外は晴れてるのになぜか切ない気分。次作のアメリカ盤とは曲が重複します。こちらのアレンジはタンバ、トリオのルイス・エサ。◆	ミルトンの育ったミナス州のゾーナ・デ・マッタと呼ばれる森林地帯の深緑を強く感じさせる瞑想的な音場は、彼の心象風景のスケッチ画のよう。彼にどっても僕らにとっても思い出深い名曲「砂の碑」が収められた。◆	水面に手を差し伸べ、その清らかな流れを慈しむように音はしつづく歩を進めていく。ハービー・ハンコックの鍵盤とナナ・ヴァスコンセロスの打楽器を軸に構成された本作は、筋書きをたたえたミルトンの声がひときわ美しい。◆	
COURAGE (1968)	GERAES (1976)	TXAI (1990)	
 <i>cloudy</i>	 <i>sunny</i>	 <i>rainy</i>	
他の同世代のアーティストの誰よりも、アメリカに進出したのが早かったミルトン。彼の名前が世界中に知られるようになったのは、このCTIに残した作品から。彫刻した小指からハートマークが生まれた。どことなく愛り空。◆	前作の『MINAS』が宇宙に向かう音楽だとすると、こちらはより大地に根づいた音楽といえるだろう。ミナスの赤土の匂いがメロディから立ち上ってくる。特にメルセデス・ソーザの参加は大きな力をミルトンにもたらしている。◆	ミルトンがブラジルの原住民であるインディオに対する強い関心を示し、アマゾン川流域のいくつかの部族の協力を得て制作したアルバム。より大きな愛で包み込まれるようだ。リヴァー・フェニックスの参加も話題になった。◆	
MILTON NASCIMENTO (1969)	MILTON (1976)	NASCIMENTO (1997)	
 <i>sunny</i>	 <i>sunny</i>	 <i>sunny</i>	
あらゆる音楽の要素が聴こえる。旋律は限り無く透明で無限に広がる。まさに60年代を締めくくり新しい時代に相応しい作品。3枚目にしてこのスケール感。針を落とせばそんな巨大なミルトンと彼の街、ミナスに出会えるよ。◆	USAでの2枚目。ハービー・ハンコックやウェインなどが参加して、一段と音楽的なスケールを増した面倒的なアルバム。意外なことに盟友ヴァギネル・チゾの不参加がミルトンの懶惰部分を前面に引き出すことになったのだ。◆	悲しいことや自らの病を乗り越えて発表されたアルバム。長く生きると何回か訪れるリセット。ミルトンにとって厳しい試練の後に咲かせた花は、見事な大輪。苦難を乗り越えるのは、大変なことだけど、頑張れば報われる。◆	
MILTON (1970)	CLUBE DA ESQUINA 2 (1978)	CROONER (1990)	
 <i>cloudy</i>	 <i>sunny</i>	 <i>cloudy</i>	
新しい時代を語るに相応しいポップなジャケット。ソン・イマジナリオという名の聖なる楽隊を従え、縦横無尽な音世界を繰り広げる、ミルトンのかけがえのない仲間たち=街角クラブが産まれた記念すべき瞬間は、ここから。◆	懐かしい同窓会のように、ミルトンとともに独自の世界を追求してきた街角クラブの面々が、新たな部員も引き連れ6年ぶりに集合。南米大陸音楽の温かな調べを個撮したミルトンの驚異！とも言えるヴァーサタイルな23曲。◆	前作で見事にグラミー賞を獲得したミルトン。自分が小さい頃から口ずさんでいる曲を録音したのがこの作品で、ミルトンによる有名曲のカヴァー集なのだ。向よりも本人が楽しくリラックスして歌っている様子が伝わる。◆	
CLUBE DA ESQUINA (1972)	SENTINELA (1980)	PIETA' (2002)	
 <i>sunny</i>	 <i>rainy</i>	 <i>sunny</i>	
街角クラブに入会希望。当时、ミルトンと彼の音楽仲間たちは、リオ近郊のアパートを借りて、じっくりと音作り。あふれ出る甘美な旋律はとめどない。人種の万華鏡のようなブラジルならではの華麗なるサウンド・モザイク。◆	新天地アリオラ・レーベルに舞い降りたミルトンがテーマにしたのは友情。彼は友情という言葉に自ら信ずるものへの厚い信仰の気持ちをあてはめている。そんな確固たるミルトンの意思がみなぎる力強いメロディの奔流を感じる。◆	久し振りにミナスの雰囲気を感じさせるアルバム。ミナスの旧友たちと3人の女性歌手の参加が注目されるが、エリス・ヘジーナの娘の存在感は大きい。60歳を迎えたミルトンはこの作品を育ての親である姉母リリアに捧げている。◆	
MILAGRE DOS PEIXES (1974)	ENCONTROS E DESPEDIDAS (1985)	MILTON NASCIMENTO MUSIC FOR SUNDAY LOVERS (2003)	
 <i>rainy</i>	 <i>rainy</i>	 <i>sunny</i>	
1曲目から何だか風雲急を告げるような力強い意思を持ったサウンドが流れ出し、ミルトンのスキットとナナ・ヴァスコンセロスのヴォイスが何かを伝えようとしている。ここからミルトンの第2期が始まった。◆	ミルトンが43歳の時の作品で、心身ともに絶好調な様子が音楽的に明確に反映されている。それまでのキャリアが全て含まれているといえるほどの完成度だ。バット・メセニーが初めて正式に参加したアルバムとしても名高い。◆	ミルトンの代表曲の多くは、60年代から70年代に在籍していたODEONに残されている。ミルトン黄金期からのベスト。空を見上げたくなるような壮大なスケールの、ミルトンの曲で魂を揺さぶられたら、君はもう仲間だ。◆	

あ、ミルトン・ナシメントご本人にお話を聞きましょう。

あなたの歌からミナスの自然を思い浮かべ
すが、ミナスは何を与えてくれましたか？

ミルトン・ナシメント（以下MN）僕はずっとミ
ヌで育ってきたんだ。小さい頃から青春時代
過ごしたし、ミナスはいつも僕の心の中にあ
る、たくさんの山々や池や湖もある。そしてミ
ヌの人々は特別な存在で、ミナスの人々もミ
ヌの一員だね。僕はこだまが大好きなので、
並みに向かって大きな声で叫んでみるんだ。
こだまというのは僕自身や僕の音楽から切り離
ないものだよ。同じようにミナスのコーラス
何のお祭り、そして教会のお祭り、すべて
の中に大切にしてあるものだ。

あなたの音楽を聴いてぜひミナスに行きた
いという日本人が多いのですが、ミナスをガイ
ドしたら、どこに案内してくれますか？

それは素晴らしい！日本人がミナスに来
てくれて、故郷のトレス・ボンタスのみならず
山まで来てくれるのは本当に嬉しい。ミナ
スのように思うかもしれないが、でも一度
はけっつけて迷かないということが分かるだ
う。もしも僕がガイド役でみんなにミナスを
案内するとしたら、歴史的に意義深いデアマン
ナ、オウロ・ブレト、チラデンチス、でも
やっぱりトレス・ボンタスは最初に連れていき
たい。

ミナスの魅力を一言で言うと？

僕が知っているどこの土地ともミナスは
うん。またミナスの中でもその町によつて
いろいろな事情がある。僕も今はリオに住んで
て尚も大好きだから、とりあえずリオを離れ
つもりはないけれど、たまにミナスへ戻って
「ミナス成分」を注射しないといけない（笑）。

フランスのヌーベル・ヴァーグ映画『突
然のごとく』を観に行って、曲作りのヒント
得たという話を聞いたことがあるのですが？

まだ音楽を始めて間もない頃に、友人の
マルシオ・ボルジェスが映画館に連れててい
れたんだけど、そこで観たのがフランソワ・
リュフォー監督の『突然炎のごとく』だった
だ。とにかく、自分の人生の中であんなに感
したことはないってくらいに感動しまくって、
の日だけでも3回も観たよ（笑）。そして映画
を出てから、マルシオに「さあ大急ぎで家に
って僕はギターを、キミはノートを用意して、
が曲を作り、キミは詞を書くんだ！」と言つ
んだよ。まさにその映画の大きな感動がきっかけになつて、僕はオリジナル曲を書くよう

なったんだ。

ファーストアルバムがリリースされた時の
気持ちを覚えてますか？

MN 初めてのアルバムを手にした時、そのLP
を自分の胸に強く抱きしめて、ひたすら泣いて、
泣いて、泣いたんだ。それがその時に唯一でき
たことだったね。

『クルビ・ダ・エスキーナ』（街角クラブ）の
思い出で印象的なことをコメントしてください。

MN あの頃はみんな一緒に住んでいたんだよ。
僕やベト・ゲヂス、ロー・ボルジェス、それか
らジャカレー（ワニ）というあだ名の、僕のいと
こもいたな。そしてみんなと一緒に旅行して、多
くの人たちに会つていろいろな音楽も聴いたし、
本もたくさん読んだんだ。そして、そういった
ことが実質的には『クルビ・ダ・エスキーナ』と
いうアルバムに繋がつてたんだと思う。

あなたがスキャットでしか歌うことができ
なかつた時代の政治状況は、あなたにとってど
ういったものでしたか？

MN それはもう本当に酷いものだった。軍事
独裁政権によって多くの友人を失つたし、多く
の人が逃げたり捕まつたりしたね。歌詞の検閲
も厳しかった。でも僕はこう誓つたんだ。「絶対
にこの国からは逃げないぞ」って。僕はブラジ
ルから一步も出ることなく住み続けた。それか
ら学生たちと一緒に仕事をしたんだ。だって、
他の仕事の道はすべて閉ざされていたからね。
一緒に旅行をしながら、お金を稼ぎ、稼いだお
金は皆で分配し、そうやって生活をしていた。
その時に気づいたんだ。マスコミやインテリが
「ミルトンの音楽はエリートのための音楽で、一
般大衆は理解できない」と言つてはいること
は見当違ひだ、とね。だって、どこへ行っても
大勢の観客たちが僕の歌で大合唱をしてくれて
いたのだから。1974年の『魚達の奇跡』では、自
分の声を1つの楽器として使うことにしたんだ。
レコード会社はその時に「この作品は中止して
他のものを作つたほうがいいんじゃないか？」と
言つたけど、僕は断固拒否して完成させた。

最新作、『ビエタ』を制作していた時のエ
ピソードがあれば教えてください。

MN “3”という数字にまつわる興味深い話
があるんだ。僕を生んでくれた母親が亡くなつ
てしまい、育ての母がリオに近いミナスのジュイ
ズ・デ・フォラまで、僕を自分の養子として迎
えに来てくれた。そして連れてこられたのがト
レス・ボンタス（3つの丘の意味）で、それ以来



僕の人生には“3”が出てくるんだ。『ビエタ』の
制作中に2人の女性歌手が参加してくれて、そ
れなりに満足はしていたものの、何か少し足ら
ないような気がしていたんだ。そうしたら、そ
こに現れたのが3人目の女性歌手で、エリス・
ヘジーナの娘のマリア・ヒタだったんだ。彼女
は僕を探し当ててきて、自分のデモCDを渡し
「私の歌を聴いた後で、私が何をすべきかを教
えて下さい」と言ったのさ。本当に偶然のこと
で信じられないのだが、彼女の母親であるエリス
が初めて僕の曲を世の中に出してくれて、今
度は逆に僕がその娘さんを世に出すことになつ
たのだから。

もしも音楽家になっていなかったら、どん
な仕事をしていたと思いますか？

MN もし僕が音楽家になっていなかったら、天
文学をもっと勉強したかったね。小さい頃に父
親と毎晩のようにベランダに出て、2人で望遠
鏡を覗いて夜空を見ていたものだよ。だから星
のことはよく知ってるよ。

青春時代、音楽以外ではどんな趣味を持
っていましたか？ 現在は何か趣味はありますか？

MN 青春時代ねえ。本当に音楽家になること
以外は考えていなかつたな。今は水泳が好きだ
ね。もしかしたら、水の中で生まれるべき生き
物だったのかもしれないね（笑）。

今、最も関心のあることは何ですか？

MN 僕は養子として育てられてきたんだが、今
度は僕が、自分が養子として与えてもらったも
のすべてを自分の養子に与えたいと思っている。

以前日本に来た時の印象を教えて下さい。

MN 初来日の時のことはとても印象に残つ
ているよ。大勢の人たちや、熱心な観客のこと、
そして僕は列車が大好きなので、新幹線のこと
も。今度は、まだ行ったことのない京都へ必ず
行ってみたいね。

日曜日にはどんな音楽を聴きますか？

MN 自分の家のミュージシャンたちが来てく
れて、そこで“ジャム・セッション”をするのが
好きだね。やっぱり僕は音楽をやっている時が
一番幸せなんだよ（笑）。